

●国土交通大臣賞（1 取組）

取組名：兵庫運河の自然を再生する活動

応募者：兵庫運河の自然を再生するプロジェクト

授賞理由：多岐に渡る地元関係者（漁協、NPO、小学校、行政、企業等）が連携し、人工干潟を活用した藻場を造成し、レッドリスト種を含む多種多様な水生生物が育つ環境を創出した点、小学生の環境教育の場としての活用や企業と連携したイベント開催等、環境教育やブルーカーボンの普及啓発に継続的に取り組んでいる点や、育成した藻場による CO2 吸収量が J ブルークレジット®で認証されている点など、豊かな海の実現やカーボンニュートラルへの貢献を目的としたブルーインフラの取組を全国に拡大する上で特に模範となる優良事例であるため。

●みなと総研賞（2 取組）

取組名：はんなん海のゆりかご再生活動

応募者：阪南市

授賞理由：自治体主導で多岐にわたる関係者（漁協、NPO、小学校、企業等）の参加を担保しており、阪南市内の小学校のカリキュラムとして藻場の再生活動等を取り入れ、さらに学年ごとに体系的な教育プログラムを設定するなど海洋教育に力を入れている点や、企業との連携・協働によりアマモ場再生活動等の持続可能性を高める工夫がみられる点、再生した藻場による CO2 吸収量が J ブルークレジット®で認証されている点など模範となる優良事例であるため。

取組名：アマモ場再生活動～21 年の実践～

応募者：熊本県立芦北高等学校林業科アマモ班

授賞理由：独自の工法を考案し、脈々と受け継がれる専門知識を持った高校生がアマモ場再生に取り組み、活動当初から藻場面積が 30 倍になるなど大きな効果が確認されている点、また、次世代を担う高校生が自ら積極的に情報発信に取り組むなど、藻場の再生活動及び青少年の育成の点で模範となる優良事例であるため。

●審査委員会特別賞（1 取組）

取組名：日本の美しい自然を次世代に引き継ぐために

応募者：一般財団法人 セブニーイレブン記念財団

授賞理由：全国的な規模で自然を守り、育てる活動を実施し、全国で行われている様々な活動を幅広く支援をしている点がブルーインフラを全国に拡大する国の取組を後押しすることにつながっているため。

【国土交通大臣賞】 兵庫運河の自然を再生する活動

- 応募者：兵庫運河の自然を再生するプロジェクト
- 構成員：2013年発足当時（兵庫漁業協同組合、兵庫運河を美しくする会、兵庫運河真珠貝プロジェクト、兵庫・水辺ネットワーク）、2016年から浜山小学校が参加
- 実施場所：神戸市兵庫区 兵庫運河（右図参照）
- 取組期間：2013年4月～（10年9ヶ月）（2024年1月末時点）
- 目的・取組内容：

「神戸で一番汚かった海を神戸で一番の里海・ゆりかごの海にする」ことを目的に、「兵庫運河の自然を再生するプロジェクト」を立ち上げ、兵庫運河の生物多様性の向上のため、アマモ場の育成、粗朶(そだ)沈床の設置、天然アサリの育成、小学生対象の観察会やアサリ学習、清掃活動等を継続して実施。

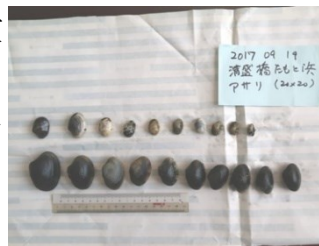
- 組織の特徴：漁協、地元企業団体、小学校、二つのNPOが協働して活動を実施。

- 具体的効果：

現在の兵庫運河には、レッドリスト対象種が15種類以上確認されるなど、豊かな里海へ改善が進むとともに、「Jブルークレジット®」認証を受けるなどカーボンニュートラルに貢献している。



取組場所（兵庫運河）



天然アサリ



粗朶(そだ)沈床の設置 コウイカ・シリヤケイカの産卵



ホソウミニナ



アマモ移植苗づくり



小学生による移植



小学生の観察会



小学生が見つけた天然アサリ

【みなと総研賞】 はんなん海のゆりかご再生活動

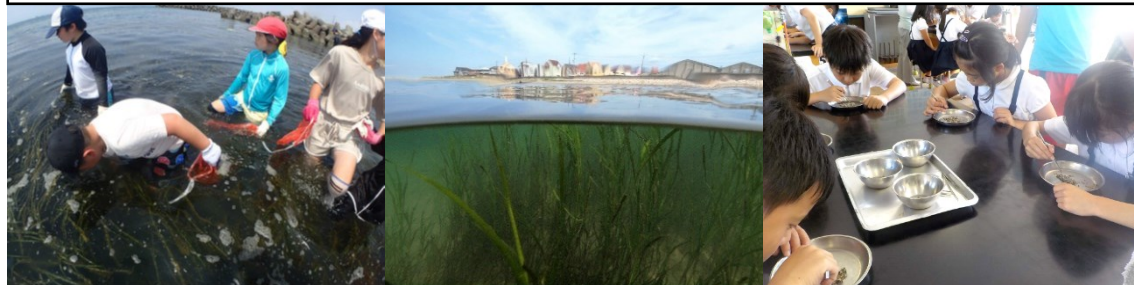
応募者：阪南市

協力者・関係者：尾崎漁業協同組合、西鳥取漁業協同組合、下荘漁業協同組合、NPO法人大阪湾沿岸域環境創造研究センター、大阪公立大学、株式会社漁師鮮度、チーム☆ガサ

実施場所：阪南市全域のアマモ場

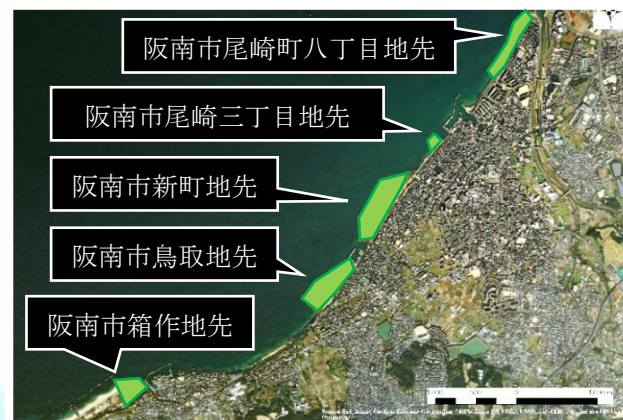
取組期間：2005年4月～（18年10ヶ月）（2024年1月末時点）

大阪府下で唯一残された自然の藻場に広がる多様な生物生息場を貴重な財産として、行政・市民・NPO・企業等が協働で保全・活用し、次世代へ継承する



- ・海洋教育パイオニアスクールプログラムを活用
市内全小学校・全学年で、環境・海洋・森里川海の繋がりをテーマに、探求型協働学習を実施
- ・はんなん海の学校を創設
中学生から子育て世代を対象に、海洋教育に関する専門的な内容や体験などを学ぶ場を提供

令和5年度前期自然共生サイト認定
全国122カ所のうち、沿岸域の自然系海岸（藻場）として、全国唯一の認定



今の大人たちはそれぞれの立場で自分のできることを、未来の大人となる今のこどもたちに
今のこどもたちは大人になったとき、自分のできることを未来の子どもたちに

【みなと総研賞】アマモ場再生活動～21年の実践～

応募者：熊本県立芦北高等学校林業科アマモ班

協力者・関係者：芦北漁協、芦北町、アグリライト研究所

実施場所：熊本県芦北町 芦北湾（計石湾）など

取組期間：2003年4月～（21年10ヶ月）（2024年1月末時点）

1. 活動のはじまり

21年前、アマモの消失と共に漁獲量が減ってきている海の異変に気づいた漁師さんより「海のゆりかごであるアマモ場を復活させてほしい」と依頼を受け、アマモ場再生活動がスタートした。日頃授業で学ぶ農学や林学の知識・技術を応用して様々なアマモの造成技術を考案し、アマモ場の再生につなげた。活動当初0.25haから令和2年6月までには30倍の7.5haまでアマモ場の拡大に成功した。

2. 本校が考案した主なアマモ場造成法

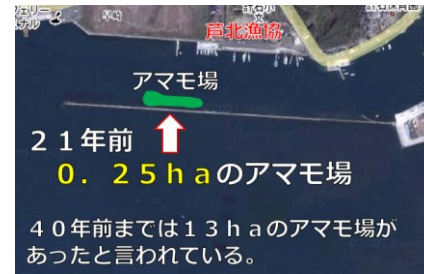
①ロープ式下種更新法（種子散布法）の考案 <平成23年考案>
花枝を採取し、50mのロープに2m間隔で花枝20本～30本を束にしたものを麻ヒモで固定し海に沈める。この方法により低コストかつ造成したい場所に大規模なアマモの種子散布が可能になった。



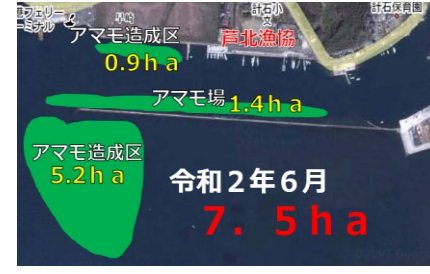
②密植法（苗5本以上を束にして移植）の考案<平成30年考案>
種子散布では造成が難しい泥地における苗の移植法。苗5本を束にして植え付けることで苗1本～2本を植える方法よりも①安定した成長、②高い生存率、③高い花枝の発生率になることを発見した。



③ヘドロを用いたポット苗栽培の考案 <令和2年考案>
令和2年7月熊本豪雨災害の発生。災害前7.5haのアマモ場は、災害後、約5haが大量の土砂に埋もれて枯死。大量の土砂はヘドロ化しアマモの生育を阻害していた。関係者一同大きなショックを受けたが、生徒たちは諦めずにヘドロポット苗栽培の技術を確立した。



平成15年 0.25ha → 令和2年6月 7.5ha



3. 芦北高校式アマモ場造成の確立

①芦北高校年間のアマモ場造成

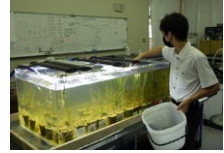
- ・種子散布「ロープ式下種更新法」にて→6月～7月に10万粒以上の播種を実施
- ・苗の移植「密植法」及び「ヘドロポット苗」にて→12月～3月に2000本以上実施

②アマモが生育しにくい泥地（ヘドロ海域）での造成方法

漁協と協力してカキ殻を敷詰めるなどの工夫を行い、土壌の巻き上がりを防ぎロープ式下種更新法及び苗の移植（密植法）を実施。

③ヘドロポット苗栽培（年間約300ポット以上栽培）

- ・水温10℃前後で発芽を促し、20℃前後で生育を管理する。
- ・30cm以上に育てた苗を海に移植することで高い定着となる。



4. 取り組みの成果

21年前「アマモって何？」からスタートしたこの活動は多くのアマモ場造成技術を考案し、今では県内外から視察依頼や技術指導を依頼される活動になった。アマモ場が拡大する中で漁協の方からは「良型のヒラメやカニが捕れるようになった」「稚魚の放流に大切な場所です」など、嬉しい言葉を頂いていた。令和2年7月熊本豪雨では、一夜にして山から流れてきた大量の土砂に埋もれ約5haのアマモ場が消失した。その中でも生徒たちは諦めずに逆転の発想でヘドロポット苗栽培の考案につなげられたのも、先輩から後輩にアマモの種をしっかりと繋いできた成果でもある。現在も新たな造成技術の研究を進めており、面白い結果が出ている。アマモは、生物多様性やブルーカーボンなど多くの機能を有している。SDGs達成、2050年カーボンニュートラル実現に向け、世の中の一助になれるよう、今後もアマモ場の再生（造成）を追求していきたい。

【審査委員会特別賞】日本の美しい自然を次世代に引き継ぐために

応募者：一般財団法人 セブーンイレブン記念財団

名称	関係者・協力者	実施場所	期間※
青森セブンの海の森	青森市・NPO法人あおもりこどもクラブ	陸奥湾・青森駅前干潟	2021年10月～（2年4ヶ月）
塩竈セブン海の森	塩竈市・松島湾アマモ場再生会議	塩竈市松浦湾	2020年7月～（3年7ヶ月）
館山セブン海の森	館山市・NPO法人たてやま海辺の鑑定団	館山市沖ノ島	2021年3月～（2年11ヶ月）
東京湾UMIプロジェクト	国交省・NPO法人海辺つくり研究会	横浜市海の公園	2011年6月～（12年8ヶ月）
阪南セブンの海の森	阪南市・NPO法人大阪湾沿岸域環境創造研究センター	阪南市	2018年6月～（5年8ヶ月）

※期間は2024年1月末時点

目的：「セブンの森・セブンの海の森」では、地域住民やNPO、行政と連携し、地域に親しまれ、愛され次世代に繋げる地域一体型の森づくりを継続し、脱炭素社会の実現と生物多様性の保全に貢献できるよう取り組んでいます。

